

# 吃音症の自分が思ったこと

木更津市立岩根中学校 一年 針山 紗季

吃音症とは何か知っているだろうか。吃音症の症状は人それぞれだが、話している途中に詰まったり、なめらかに言えない、言えなくて何回も連呼してしまうということがある。吃音症は発声障害だ。

私は、小さい頃から吃音症を患っている。私は、あ行が言いにくい。あ行が頭の文字があると詰まったり連呼してしまう。また、吃音症を患っているということで、学校生活でも困ることが、ほぼ毎日ある。発表するとき、人前で話すとき、詰まってしまい、逆にみんなを困らせてしまう。

改めて吃音症だと実感したのは小学五年生のときだ。私は小学五年生の春、大阪府の八尾市というところから、千葉県の木更津市に引っ越してきた。ちょうどコロナ禍で休校の時期だった。やがて、六月になると学校が始まり、委員会を選ぶとき私は放送委員を選んだ。確か、学級内でうまく人数が合わなかったことと、まだ吃音症を発症していなかったことから、自分で進んでこの委員会を選んだ。放送委員の仕事の一つに、昼のコーナーで話す文の原稿をつくるというものがある。私はあ行が言いにくい、五年生のときには気付いていなかった。だから、あ行が頭文字になる「明るい」という単語から始まる文を原稿に書いていた。コーナーが始まり、読もうとする。だが、声が出なかった。何度も何度も読もうとするのだが、最初の「あ」が声にならなかった。泣きそうになりながら先輩に助けを求め、そのあとの放送は無事に終わった。このとき、人前で話すのが苦手になった。言葉が詰まる放送なんて、誰も聞きたくない、と放送委員に入ったことを後悔した。言葉が詰まると、自分が嫌になっていった。そのとき、普通に話せる人が羨ましく感じた。私がもし、吃音症を患っていなければ、もっと充実した毎日になっていたのだろう、と考えもした。吃音症を患っている自分に自信がなかった。だから「私じゃなくても誰かがやってくれるのなら、そっちのほうがいい。やってみたいけれど、迷惑になったり困らせてしまうだけだし。」と遠慮してしまうときもあった。けれども、やらないといけないときもある。それは、小学六年生のとき。私は、運動会で応援合戦の振り付け決めや、前のほうで呼びかけたりする応援係になった。応援係の仕事の一つに、一から六年生に振り付けを教えるということがある。私は正直、嫌だった。上手に

教えられるかわからないし、不安で心がいっぱいだっただ。私は、一年生の担当になった。一年生とは、ペア活動で交流がある。だから、緊張も少しは解けていた。だが、私は吃音症で上手に話せないときがたびたびあった。それでも、一年生は一生懸命に聞いて、振り付けも覚えてくれた。そのことが本当に嬉しく、自信にも繋がった。

私は、過去にこのようなことを言われたことがある。詰まってしまって上手に話せないときに、「何！？ちゃんと言って！聞き取りづらい！」と、ショックだった。そして何より、自分が嫌いになった。相手にも、嫌な思いをさせているかもしれないとわかったからだ。それと同時に私は、「吃音症」というものを知ってほしい。世の中には、吃音症を知らない人が、まだ、たくさんいると思う。吃音症の辛さが知られていないために、私と同じ思いをしている人が少なくはないはずだ。そして、苦しい思いをしていたり、困っていたら、助けてあげてほしい。吃音症を患っている人でも、話すときはその人なりに頑張っているのだ。私が言葉が出ずに泣きそうなのを助けてくれた先輩、そのときに救われた思いは今も忘れない。

私は、吃音症の自分が嫌いだ。やりたいことがあっても、どこか遠慮してしまう。何度普通に話したら、と思ったことか。けれども、全て吃音症のせいにして、何もやらないのはもったいない。人生を損してしまう。最近、このことに気が付いた。応援練習のときの小学一年生が私に与えてくれた自信。その自信によって、中学校でも学年の評議会に参加した。吃音症の治し方は、今現在もわかっていない。ただ、大人になるにつれて治っていく人が多いとのことだ。私も実際、昔より症状は断然良くなってきており、詰まることは少なくなった。吃音症の治し方はわからないけど、吃音症との向き合い方は少しわかった気がする。そして、それを乗り越えるために、この文章を書き、前向きに今ここに立っている。